

若者のインターネット依存傾向形成要因と特徴に関する心理学的研究

— グラウンデッド・セオリー法を用いて —

友納（鄭）艶花
九州女子大学人間科学部

A Psychological Study on Shaping Factors and Features of Internet Dependence Tendency
among Young People —Using Grounded Theory Approach—

Enka TOMONO (TEI)

Abstract

In this study, we investigated the shaping factors and the features of internet dependence tendency, because they are critical elements of what affects building and developing healthy personalities of young people in the current information age. We performed semi-structured interviews with young people who are aware of daily life problems due to their internet dependence, and analyzed the obtained data with a Grounded Theory Approach. As the result, we have proposed a shaping factor model of internet dependence tendency. It consists of the following six factors: 'physical environment', 'individual personalities', 'psychology and emotions', 'psychological stress', 'personal relationships', and 'family conversation effects'.

Keywords: *the current information age, daily life problems, the shaping factors of internet dependence tendency, Grounded Theory Approach*

1. 問題と目的

人は技術や文化の創造性を発揮するインターネットに適応しているのか（池田ら, 2005）という問いに答えるかのように近年では情報社会におけるインターネットコミュニケーションやインターネット依存問題に関するテーマに興味関心を持つ若者が増えている。IT時代と共に成長して若者の健全なパーソナリティ形成と発達に何らかの影響を与える大きな要素の一つとしてインターネットへの依存問題は無視できない（文科省, 2002）と研究の必要性が提起されている。

先行研究において、インターネット依存症に罹患しているかどうか判断するのに必要な診断基準を作ろうとすることに多くの努力が注がれてきた（Young, 1998/1998; Davis, 2001）。それに比べて、インターネット依存を引き起こすモデルについては、あまり検討されていない（Joinson, 2003/2004）のが現状である。

また、数少ない研究の中で、Young（1998/1998）は、潜在的に依存を引き起こす要因として「匿名性（Anonymity）」「利便性（Convenience）」「逃避性（Escape）」と挙げ、インターネットの属性に注目している。また、Davis（2001）は、インタ

ーネット依存とはやや違う次元として、病的インターネット利用者（オンラインギャンブル、オンラインセックスなど）について、認知（抑うつ的なスキーマ、反芻的思考、低自尊心）が抑うつ症状を引き起こすとする抑うつ認知の説明と同様のアプローチが病的なインターネット依存利用にも適用できると考えている。それは、脆弱性ストレス・アプローチをインターネット依存症に適用している。ところが、2つの研究とも海外の研究であり、日本との文化差があることも考えられ、日本での検討が必要であろう。

そこで、本研究では、インターネット依存傾向を自覚している大学生を対象として、半構造化面接調査を行い、①インターネット依存傾向の形成要因を探り、その特徴について検討を行い、日本版インターネット依存傾向形成要因モデル作成を試み、②その要因と特徴を先行研究と異同を考察することを目的とする。

2. 方法

【調査対象者の募集と選択】

文系と理系の大学生を募集し、12名が対象者となった（男性5名、女性7名）。平均年齢は19

歳 (SD=0.94)。A市とB市の文系と理系の大学の講師と知人にメールで協力を依頼する。同時に、本研究の目的と方法などについて説明し、募集の協力を得ることができた。調査協力者募集案内を作成し、授業直後に配布を行い、説明を行った。質的研究の対象者募集手法の一般的方法として最初から研究の目的に合った対象者を意図的に選択する方法があり、今回は半構造化面接を用いた。また、研究目的の主旨から、応募された対象者に研究目的を説明した上、調査対象者の選択範囲は鄭(2008)により分類した「生活支障型依存傾向群」であることを判断した大学生に半構造化面接を実施した。なお、筆者はいずれの面接対象者とも面識はなかった。面接場所は、話し合いを通じて合意された某大学の図書館の個室を予約した。平均面接時間は1時間程度である。

【手続き】

Young (1998/1998), Joinson(2003/2004), 鄭(2007)などの先行研究を参考に調査項目を準備し、半構造化面接を行った(表1)。対象者の同意を得てICレコーダーに録音を行う。面接では、話しやすいところから話してもらい、話題を柔軟に展開させていった。

表1 面接調査項目

1. 対象者のプロフィール 年齢・学年・家族構成・社会的活動の有無
2. インターネット使用の事実関係と依存傾向の有無の確認 初使用から現使用における状況、使用頻度、 インターネット依存傾向自己採点、筆者作成した依存傾向尺度項目の質問
3. 本人のインターネット依存傾向について自由発言
4. インターネット使用による日常生活への影響
5. インターネット使用と友人関係・家族関係
6. インターネット依存傾向とストレスと対処
7. インターネット依存傾向にならないような対処法
8. インターネット依存傾向と他の依存との異同点
9. 面接を受けた感想

【倫理的配慮】

本研究では、個人にとってプライベートな話を扱うところがあり、倫理的に配慮が必要と考え、Willig (2001/2003) の挙げている倫理要綱を参考に配慮を行った。

(1) まず、本研究の主旨を十分に伝えて理解を求めた上、話したくないことは無理をして話す必要はないことを伝え、安心して面接に望めるように配慮した。

- (2) 面接の場所や設定をめぐって、面接中に話し声が漏れたり、他者が入ってくる心配がなく、対象者が安心できる十分な広さのある個室を利用した。
- (3) 騒音、空調など問題がなく快適であること。
- (4) 面接前後ともに筆者から、本研究での面接内容は個人が特定されないように取り扱うこと、及び筆者の研究に使用されることなどについて対象者に説明を行った。

【分析方法】

ICレコーダーの録音をもとに面接の逐語記録を作成し、対象者ごとにそれぞれの発言内容のまとめを行った。

分析は、グラウンデッド・セオリー法(Glaser&Strauss, 1967/1996)を参考に、5段階で行われた。まず、第1段階としては、面接逐語録に含まれるインターネット依存傾向形成要素を最も端的に表す言葉、例えば「寂しさ」(A)等、「達成感」「漠然とした不安」(B)等、「両親が干渉しない」「人としゃべるとストレス」(B)等)によるラベルづけ作業で概念化を行った(Strauss, al&Corbin, J, 1990/1999)。第2段階では、面接逐語録に含まれるインターネット依存傾向形成要素に着目し、第1段階で得られた概念の意味を、データを参照しながら考察し、ラベルに加えた(例、「寂しさ→依存性」(A)等、「達成感→満足性」「漠然とした不安→心配性」(B)等、「両親が干渉しない→放任」「人としゃべるとストレス→ストレス」(B)等)。第3段階では、こうして得られた概念の中で類似したものを統合し、依存形成を構成する特徴上位カテゴリーの生成を試みた。質的分析は円環のプロセスをたどることが知られているが(Spradley, 1980)、本研究において第4、5段階としてデータと概念の間を繰り返し往復しながらカテゴリーを構成する概念の意味を解釈し、カテゴリーの練り直しを行い、最終的上位カテゴリーを構成し関係確認作業を行い、新しいモデルの生成を試みる。

3. 結果と考察

12名の面接調査対象者のプロフィール状況を次の表2にまとめた。そして、逐語録はプライバシーを保護するため、個々が特定されないように配慮したうえで、発言内容の特徴を概略記述する(表3)。

表2 面接調査対象者（生活支障型依存傾向群）のプロファイル

性別	年齢	所属		居住形態	兄弟状況	社会活動	初使用	自覚得点	J-尺度合計点	その他
A女	20歳	大3	文系	家族同居	長女	アルバイトあり	高1	7点	196点	
B女	20歳	大3	文系	家族同居	末っ子	アルバイトあり	中1	6点	184点	
C女	20歳	大3	文系	家族同居	真ん中	ネット上のバイト	大2	6.5点	147点	兄ひきこもり
D女	20歳	大3	文系	家族同居	長女	いまない、以前あり	中3	7点	196点	
E女	20歳	大3	文系	家族同居	長女	アルバイトなし	高1	6.5点	150点	
F男	18歳	大1	理系	一人暮らし	独子	アルバイトなし	小	7点	190点	
G女	18歳	大1	理系	家族同居	長女	アルバイトなし	中	6.5点	171点	妹ゲーム熱中
H男	19歳	大1	理系	一人暮らし	独子	アルバイトなし	小6	8.5点	84点	
I女	18歳	大1	理系	家族同居	長女	アルバイトなし	小	8点	184点	弟ゲーム好き
J男	19歳	大1	理系	一人暮らし	長男	アルバイトなし	中3	5点	178点	高時1年留年
K男	18歳	大1	理系	家族同居	末っ子	アルバイトなし	小5	7点	108点	
O男	18歳	大1	理系	一人暮らし	長男	アルバイトなし	小2	5点	82点	父PC開発

*自覚チェック：0点依存傾無→10点依存が非常に高い *J-尺度における「生活支障型依存傾向高群」の平均点は147点

表3 若者の発言からみるインターネット利用の特徴

A女	縦の関係がだめ、ネットならなにかやっている自分がある	G女	「同じ趣味が合う人としか話をしない、自由時間がネットする時間」
B女	気分揺れながら「携帯がないと不安」	H男	点数以外はのびのびだが、外にでるのが面倒」
C女	人としゃべる時ストレスを感じるがネットで人とつながっている	I女	自分も人間も好きでない、敵を倒すとき爽快感がたまらない」
D女	「合わない人が多く、寂しい思いをしていたかも」と語る	J男	「人見知りで、まじめで一度の人生デカイ人物になりたい」
E女	「現実では受身だが、ネットでは言い合いをしている」	K男	「暇だとストレス」常に達成感を求める
F男	「一方的に言えるし、敵を倒せるのが楽しい」	O男	「分身を育ててネットでコミュニケーションをとっている」

3.1 インターネット依存傾向形成要因とその特徴

面接調査者のデータをグランデッド・セオリー法で分析した結果を表4で示されたような6つの上位カテゴリーと25個の下位カテゴリーの生成が検討できた。以下、生成したカテゴリーの特徴を考察する。

(1) 物理環境的要因

本カテゴリーでは、まず、「中1の授業で初使用」「中3からパソコンの授業」「ネットがあるからずっと家にいるかも」「パソコンは家で購入、もっと便利で日常」などと面接者たちより小、中、高のある時期からパソコンや携帯が購入され生活の必需品のような身近な存在とした発言が特徴とされ、<①身近な環境>要因が考えられた。次に、「自分の部屋にあるので文句言われない」「自分の部屋にあるので親は気づかない」などいまの青年たちは以前に比べ自分たちの部屋を持って邪魔されない個室的な環境でインターネットができる有利な環境にあるという発言が特徴とされる<②個室的な環境>が考えられた。そし

て、「家の中で常に、トイレにも持って行く」「携帯から移動中もできる」など今まではなかったいつでもどこでも持ち歩ける便利さや移動可能というインターネット接続環境の簡単さという発言が特徴とされ、<③可移動式環境>が考えられた。このようなエピソードは、インターネットは移動可能な一つの大きなプライベート空間としていつでもインターネットに接続できる物理環境要因の存在が考えられた。また、「ネットだったら見えない、その感覚が好き」、「匿名の言い合いが好き、何も考えず言える」などインターネット利用行動において顔が見えないで、対面状況がない形を表す発言からは匿名的な環境がインターネット利用に利便性を与えていることが考えられ、<④匿名的な環境>と考えられた。

(2) 個人性格的要因

このカテゴリーでは、まず、「見ていいのか心配」「見てくれると安心」「嫌われているのではと不安」のようないろいろと物事を敏感に考えて心配や不安を表す発言が特徴とされ、<⑤心配性>と考えられた。また、「外出が面倒」「外に出

たがらない自分」「自分の世界に逃げ込む」「ひきこもり」などあまり活動的でなく、家や自分の世界にこもって消極的になっている発言が特徴とされ<⑥消極性>が考えられた。「被害妄想が激しい」「一人でうまく過ごしきれない」「さびしいとき」などの発言からはひとりでうまくいられなく、孤独感を感じながらネットをしてしまうことが特徴とされ<⑦依存性>と考えられた。そして、「人見知り」「受身」「我慢」「自分から

話しかけない」「積極性がない」などでは、心的エネルギーが内向きになっている内向的な発言が特徴とされ<⑧内向性>が考えられた。

Joinson et al (2002)は内向的な人にとっては、インターネット使用は社会的孤立と孤独感を増大させているようであり、外向的な人にとっては、社会への関与水準を引き上げているように示されているが、本研究では、インターネット依存傾向を持っている大学生は内向性が多いことが考

表4 インターネット依存傾向形成要因カテゴリーと特徴

上位カテゴリー	下位カテゴリー	カテゴリーの概念と内容
I 物理環境の要因	①身近な環境	概念:面接者たちより小,中,高などのある時期からパソコンや携帯が購入され生活の必需品のような身近な存在とした発言が中心である。 「高校から使用」「携帯が身近すぎ」(A・E),「中1で授業で初使用」(B),「中3からパソコンの授業」「ネットがあるからずっと家にいるかも」(D),「小学校から授業で」(F・H・I),「パソコンは家で購入,もっと便利で日常」(G),「初は中学校,自分の部屋でやっている」(J),「小学校から使用,高校から家でパソコン購入,依存し始める」(K),「小2から,父の仕事関係で家にパソコンがある」(O)
	②個室的な環境	概念:いまの青年たちは以前に比べ自分たちの部屋を持って邪魔されない個室的な環境でよくネットを行っている発言。 「寝る前に部屋が真っ黒のとき携帯持っている」(B),「自分の部屋にあるので文句言われない」(C),「自分の部屋にあるので親は気づかない」(G),「初は中学校,自分の部屋でやっている」(J)
	③可移動式環境	概念:いつでもどこでも持ち歩ける移動可能なもので便利という発言。 「家の中で常に,トイレにも持っていく」(A),「携帯から移動中もできる」(D),「携帯は毎日,なんでもかんでも」(E),「中学校から携帯,常に持つ」(G)
	④匿名的な環境	概念:インターネット利用行動において顔が見えないで,対面状況がない形を表す発言。 「未知なら気づきがあるときがある」(A),「ネットだったら見えない,その感覚が好き」(C),「会わなくても話せるんだと感動」(D),「匿名の言い合いが好き,なにも考えず言える」(E),「顔が見えないのが一番,ネットでストレス解消」(F)
II 個人性格の要因	⑤心配性	概念:いろいろと物事を敏感に考えて心配や不安を表す発言。 「みていいのか心配」「早くだれかに言いたい」「言えると思ったが,社会にでると考える」「指示に全部従う」(A),「展開が速すぎると自分に向かない」「みてくれると安心」「漠然とした不安が強かった」(B),「断れ切れない自分」(C),「嫌われているのでは不安」(D),「気を使うのが面倒くさい」(E),「真剣に考えるタイプ」(J),「同じ趣味の人と話さないとつまらない」(O)
	⑥消極性	概念:あまり活動的でなく家や自分の世界に消極的になっている発言。 「すでに1週間ひきこもり」「外出が面倒」(H),「外に出たがらない自分」(G),「自分の世界に逃げ込む」「ひきこもり」「面倒」(I),「面倒」(E)
	⑦依存性	概念:ひとりでうまくいられなく,孤独感を感じながらネットをしてしまう発言。 「さびしがりがや」(A・E),「被害妄想が激しい」「一人でうまく過ごしきれない」(A),「暇がストレス」(K)
	⑧内向性	概念:心的エネルギーが内向きになっている内向的な発言。 「こまかい話ほしくない」(C),「人見知り」(D・J),「本音ではなせる人がいない」(D),「受身」「無口」「話苦手」(E),「我慢」(F),「自分から話しかけない」「積極性がない」(G),「まじめ」(J)
III 心理情緒的 要因	⑨衝動性	概念:あまり深く考えずにやっているような衝動的行動の発言。 「なにかしようとしてネットする」(A),「発散方法は買い物していっぱい買う」(B・E),「人の日記を全部チェックする」「ストレスたまと食べてしまう」(C),「暇なときは気づいたらやっている」(C・D・E・H・I・J)
	⑩直観性	概念:なにか経験的に対象に対する見解で直観的な発言。 「人を理解することをあまり重要視しない」「完璧にしない」「あまり深く仲良くなりたくない」(G),「ヒーローが好き」「デカイ人物になりたい」(J)
	⑪抑制性	概念:考えていることを自己制御している発言。 「主張したい自分がいるが,普段は主張しない」(E),「聞き上手でもない,話し上手でもない」(F),「話すのはすきだが,話題には戸惑う」(O)
	⑫肯定性	概念:インターネットの利用における利便性,多様性などに対する肯定的気持ちを表している発言。 「便利」(A・B・D・E・G・K・O),「共感」(A),「楽しい」「面白い」(A・B・C・D・J)
	⑬満足性	概念:インターネット利用によって気持ち的に何らかの満足を感じていると思われる発言。 「わくわく」「自分が足りないものを補う感じ」(A),「達成感」「早く打つと嬉しい」(B),「ネット使ったら気分がすっきり」(D),「自由」(E),「ストレス解消」「自由」(F),「するとき興奮する」(J),「分身を育てて楽しい」(O)

表4 (続) インターネット依存傾向形成要因カテゴリと特徴

上位カテゴリ	下位カテゴリ	カテゴリの概念と内容
IV心理ストレスの要因	⑭社会活動	概念: 上司との縦関係が問題だったりバイト先がいやと思うような社会活動への抵抗に関する発言。 「縦の関係がだめ、問題です」(A・B), 「バイトに行くのがいや」(C)
	⑮競争性	概念: 学業における成績の高低への関心が主な発言。 「テストできないとき」(A), 「勉強成績」(J), 「成績が気になる」(H)
	⑯対人コミュニケーション	概念: 対人関係においてもコミュニケーションが焦点となった発言。 「人としゃべる時、特に知っている人としゃべる時」(C), 「人間関係、合わないと思う集団」(D), 「親族関係」(F), 「対人関係、親と話が合わない」(I), 「自分の話や意見を聞いてくれない」(O)
	⑰抑圧性	概念: 回避したり、否定したり、よくわからなかつたりする発言でストレスに関する反応を防衛する抑圧性の発言。 「ストレスをあまり感じないかも」(G), 「たぶんいっぱい、考えないようにしているかも」(E), 「よくわからない」(H), 「たぶんあった。暇だとストレス。たぶんあまりたまらないまう」(K), 「普通じゃない」(O)
V対人関係の要因	⑱希薄な関係	概念: 接触はあるものの関係性が薄く少ない対人関係である発言。 「クラスに仲いい人もいるが、一人ぐらい」(A), 「深く入れる友達は限られて狭く深く」(D), 「日常の友達はいたが、かける人数は少ない」(F), 「人との接触はそれなりに。そとにでるのが面倒。あまりうごかなくて人と話ができるのがいい」(H)
	⑲対人不安	概念: 人とのかわり時に不安を持っている発言。 「友達と話すのも目を見るのができない。メール電話しかできない」(C), 「受身的で人の前でうまくしゃべれない、嫌われたくない」(E)
	⑳一体性の過剰希求	概念: 自分と同じ趣味でないと関係がうまくいかない自分との一体性を求める発言。 「同じ趣味が合う人としか話する」(G), 「嫌いな人とは話しません」(I), 「同じ趣味の人が多い」(O)
VI家族会話機能の要因	㉑相談型	概念: 家族間で話し合いが機能している発言。 「家族関係はいい。思ったことを言える。両親もよく言ってくれる」(A), 「なんでも話せる関係。メールより話をする形」(B), 「親とはよく話し合う」(F)
	㉒放任型	概念: 子どものことについてあまり関心を示さず、ほったらかす状態で会話があまり機能されていない発言。 「両親はあまり干渉しない。こまかい話はしない。兄は引きこもりがち」(C), 「家族は互いにあまり干渉しない。相談もしない」(G)
	㉓厳格型	概念: 父親が成績に厳格で母親も随従するような会話機能の発言。 「父とはあまり話さない。妹・母とはポジティブな話。うわべな話」(D), 「父とはだめ、会話ができない。母とはまあまあ」(J)
	㉔援助型	概念: 家族会話機能よりは親からの普段の態度や行動あるいは物的などよくしてもらっている援助的な家族機能が働いている発言。 「関係はそこそこ、よくしてもらっているが、相談はしない」(H), 「大学は親の意思。よくしてくれた」(K), 「仲は悪くない。親子コミュニケーションができないわけではない」(O)
	㉕遠慮型	概念: 親には自分たちの意思をつたえることができず、親とのコミュニケーションをすることへの遠慮を示す発言。 「親とはよくわからない。理解しようと思わないし、理解してもらえなくてもいい」(I), 「家では主張は全然しない。親は普通。自分が無口」(E)

えられた。

(3) 心理情緒的要因

このカテゴリでは、「何かしようとネットする」「人の日記を全部チェックする」「暇なときは気づいたらやっている」などあまり深く考えずにやっているような衝動的行動の発言が特徴とされ、<⑨衝動性>が考えられた。次に、「人を理解することをあまり重要視しない」「完璧にしない」「ヒーローが好き」「デカイ人物になりたい」など直観性を表す発言が特徴とされ、<⑩直観性>が考えられた。続いては、「主張したい自分があるが、普段は主張しない」「話すのは好きだが、話題には戸惑う」などと考えていることを自己制御している発言が特徴であり、<⑪抑制的>

が考えられた。また、「便利」「共感」「楽しい」「面白い」などとインターネットの利用における利便性、多様性などに対する肯定的気持ちを表している発言が特徴とされ、<⑫肯定性>が考えられた。インターネットはかけがえのない情報の架け橋 (Joinson, 2003/2004) を提供することができること、Grohol (1999) のインターネット上の趣味を同じくするグループなどから情緒的に肯定的である結果と類似の要因が示された。そして、「自分が足りないものを補う感じ」「達成感」「ネット使ったら気分がすっきり」などインターネット利用によって気持ち的に何らかの満足を感じていると思われる発言が特徴とされ、<⑬満足性>が考えられた。Allport (1937) は自尊心は人間存

在の主要な目的であり、Joinson(2003/2004)は、自分自身を肯定的に呈示し、また肯定的にみるという自尊心の肯定的な感覚を求める欲求が自己高揚であるとされているが、本研究においても「自分が足りないものを補う」「自分の分身を育てて評価してくれるのがうれしい」というインターネット依存傾向者の自己高揚における満足感が考えられた。

(4) 心理ストレスの要因

このカテゴリーでは、「縦の関係がだめ、問題です」「バイトに行くのがいや」というような上司との縦関係の問題、バイト先がいやと思うような社会活動への抵抗に関する発言が特徴とされ、<⑭社会活動>が考えられた。次に、「テストができないとき」「勉強成績が気になる」など学業における成績がストレスになったとの主な発言が特徴とされ、<⑮競争心>と考えられた。また、「人としゃべる時、特に知っている人としゃべる時」「対人関係、親と話が合わないこと」など対人関係においてもコミュニケーションがうまくいかないことがストレスとなったことの発言が特徴とされ、<⑯対人コミュニケーション>が考えられた。ここでは、社会生活の中でコミュニケーションを求めているものの、うまくいかないときそのストレスを外に出せず、匿名性の高いインターネットを優先して利用していることが考えられた。そして、「ストレスをあまり感じないかも」「多分いっぱいあるが考えないようにしているかも」などの発言からストレス反応を防衛する抑圧性が特徴とされ、<⑰抑圧性>と考えられた。Wastlund et al (2001) はインターネット利用と精神的悩みは関連がないと示しているが、本研究においては、それらが抑制され、意識させないように防衛的に働いているのではないかと推測された。

(5) 対人関係の要因

このカテゴリーでは、「仲がいい人もいるが一人ぐらい」「日常の友達はいたが、声をかける人数は少ない」などと接触はあるものの関係性が薄く且つ少ない対人関係である発言が特徴とされ、<⑱希薄な対人関係>と考えられた。次に、「友達と話すのも目を見るのができない。メール電話しかできない」「受身的で人の前でうまくしゃべれない、嫌われたくない」などの発言は人とのかわり時に不安を持っていることが特徴とされ、<⑲対人不安>が考えられた。また、「同じ趣味

が合う人としか話さない」「嫌いな人とは話しません」など自分と同じ趣味でないと関係がうまくいかない自分との一体性を求める発言が特徴とされ、<⑳一体性の過剰希求>が考えられた。

(6) 家族会話機能の要因

このカテゴリーでは、「家族関係はいい。思ったことを言える。両親もよく言ってくれる。」「なんでも話せる関係。メールより話をする形」などと家族間で話し合いが機能している発言が特徴とされ、<㉑相談型>が考えられた。次に、「両親はあまり干渉しない。細かい話はしない。兄は引きこもりがち。」「家族は互いにあまり干渉しない。相談もしない」「親とはよくわからない。理解しようとも思わないし、理解してもらえなくてもいい」などの発言から、子どもが親からあまり関心を示されず、ほったらかされた状態であることが窺える。また、あまり会話が機能されていない発言である特徴から、<㉒放任型>と考えられた。また、「父とはあまり話さない。妹・母とはポジティブな話。うわべな話」「父とはだめ、会話ができない。母とはまあまあ」など父親が成績に厳格で母親も随従するような会話機能の発言が特徴とされ、<㉓厳格型>と考えられた。そして、「関係はそこそこ、よくしてもらっているが、相談はしない」「大学は親の意思。よくしてくれた。」など家族会話機能よりは親からの普段の態度や行動あるいは物質的によくしてもらっている援助的な家族機能が働いている発言が特徴とされ、<㉔援助型>と考えられた。また、「家では主張は全然しない。親は普通。自分が無口。」など親には自分たちの意思を伝えることができず、親とのコミュニケーションをすることへの遠慮を示す発言が特徴とされ、<㉕遠慮型>が考えられた。

3.2 日本版インターネット依存傾向形成要因モデルと先行研究との異同

GTA分析を行い、各要因の特徴および関係性の再考と反復的検討を行った結果、新しい日本版インターネット依存傾向形成要因モデルが生成された(図1)。先行研究では、「インターネット」が要因として最初に取り上げているが、本モデルでは、インターネットは青年の成長過程において、一つの環境として示され、他の要因の相互的な影響を受け、不適切な認知が生じる依存行為であることが考えられる。

先行研究の、Young(1998/1998)のインターネッ

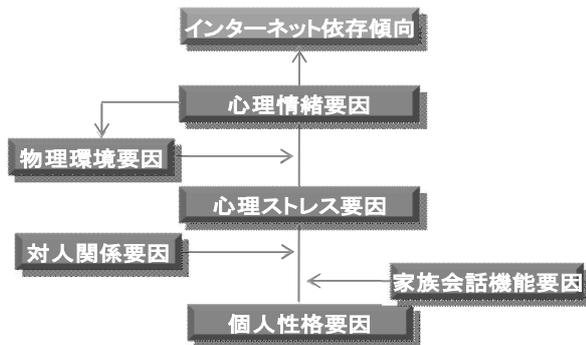


図1 インターネット依存傾向形成要因モデル

ト依存を引き起こす要因と Davis (2001) の病的インターネット利用における認知 - 行動モデルが示されたものの、インターネット依存傾向形成要因についての多様な要素として捉えられた研究はあまりなかった。本研究を含め、それぞれの研究が異なる視点からではあるが、インターネット依存に関わる要因を研究することを目的に考えているのは類似している。そこで、本研究の6要因が Young (1998/1998)、Davis (2001) との研究結果との異同を考察してみたい。

(1) Young との比較

Young (1998/1998) は、インターネット依存を引き起こす要因は「匿名性」「利便性」「逃避性」の3つであることを示唆している。本研究では、インターネット依存形成要因の一つである下位カテゴリーの「匿名可能な環境」という視点に取り入れ、<物理環境の要因>として位置付けられた。「匿名性」は通常「識別性の欠如」を示すが、コンピュータ媒介型コミュニケーションは「視覚的に匿名な状況」で運営され、「識別性の欠如」はない (Joinson, 2003/2004) ことから、インターネット利用行動において顔が見えないで、対面状況がない環境として考えられる。

また、Young (1998/1998) の「利便性」に関しては、本研究では「パソコンは家で購入、もっと便利で日常」(G)、「携帯から移動中もできる」(D) など利便性についての発言が多かった。本研究では、そのような「利便性」を、生活環境の変化 (Life Change) が疾病の心理社会因であることが見出される (Holmes & Rahe, 1967) 視点と情報技術の進歩による生活環境の変化がストレスを生む (丸山, 1994) 視点を取り入れ、「身近な環境」「個室的環境」「移動可能な環境」を含めた<物理的環境の要因>として捉えた。そして、現代文明社会

が人間をとりまく状況をパースペクティブにシユーマ化し、第2次→第3次へ産業革命が進行するなかで、労働や生活の在り方が変化し、ストレスと関連した症候群がさまざまに析出していることを示している (丸山, 1994) 如く、「利便性」のあるインターネットの使用環境や機能の多様化などはインターネットの普及に伴う便利さ有用性を拡大した同時に、インターネット依存傾向形成の一つの要因として示されたと考えられる。

次に、「逃避性」について Young (1998/1998) は心理ストレスからの逃避として示しているが、心理ストレスの具体的内容については示されなかった。本研究では、「心理ストレス」の具体的側面が検討され、逃避する側面以外に、ストレスがあることを否定したり、よくわからないと発言することからストレスに関して防衛的態度をとっている抑圧的な面も伺われた。そして、衝動性がある中、抑圧されたものがインターネットで自分の分身を作って評価してもらうこと (O さん) や言い合いをすること (E さん)、或は受容してもらうことで「満足感」を味わっていることなどから、インターネット上において、心理ストレスコーピング状態が生じていることが考えられ、それが依存傾向への進行の一つの要因につながるということが伺えた。そして、Young (1998/1998) は、依存要因以外として「孤独感」を挙げているが、本研究の結果からは、日本の青年は孤独感のみでなく、衝動性、肯定性、満足性などのその他の情緒的要因もあることが示唆された。

次に、Young (1998/1998) は、「自信家、単独活動、感情的反応が強い傾向の人をとりあげているが、本研究では、「心配性、消極性、内向性」など「個人性格的要因」として見られ、日本とアメリカの青年の性格の違いや文化の違いが考えられた。また、Young (1998/1998) はインターネット依存が対人関係、家族関係に影響を与えると指摘しているが、本研究では、「対人関係」、「家族会話機能」がインターネット依存傾向形成要因として追加された。

(2) Davis との比較

Davis (2001) は、病的なインターネット利用について研究を行い、認知的側面を重視し、病的なインターネット利用者に脆弱性ストレス・アプローチモデルを適用している。

ストレスがインターネットを人々の生活に引き入れ、その経験が強化され (例：孤独なときに

チャットルームに入る), ついでに「不適応の認知」と結びつき, その他, ソーシャルサポートやもしくは社会的孤立が加わり, 病的利用と解釈している。そこで, Davis(2001)の言う「インターネット」という存在が, 本研究の形成要因からみると「環境的要因」として考えられ, 「病的利用」というのは本研究における「心理情緒的要因」からくる行動対処としての「インターネット依存傾向」と考えられ, この部分では類似のところが見られる。しかし, Davis (2001) は認知的側面を重視しているが, どのような状況での認知なのか具体的な要因が示されてなく, 本研究では, 「環境的要因」がある中で, 「個人性格」, 「心理ストレス」, 「対人関係」, 「家族会話機能」の要因において「不適切な認知」が生じ, インターネット依存傾向形成に影響を及ぼすことが示された。

4. まとめと課題

本研究では, 「物理環境の要因」「個人性格の要因」「心理情緒的要因」「心理ストレス要因」「対人関係の要因」「家族会話機能要因」6 要因とその特徴がそれぞれ具体的に考察され, 新しい日本版インターネット依存傾向形成要因モデルが提示された。数少ないインターネット依存傾向形成要因研究の一助と考えられるだろう。また, 上記のような形成要因をより充実に検討を行い, Young(1998/1998)の研究, Davis(2001)の研究との異同が考察された。これは新たな研究方法論で検討を行ったものとして意義があるだろう。そして, 日本版インターネット依存傾向形成要因モデルでは, 「個人性格要因」「家族会話機能要因」「対人関係要因」の3つの要因が追加考察され, この研究領域におけるモデル化検討の参考となるだろう。

しかし, 今回の調査は被験者数が少なく, 更なる研究の積み重ねが必要であると思われる。依存関連の面接調査研究は非常に少なく, 面接対象者募集における限界があったことから, 今後は面接調査対象者の選択における客観性を高める工夫が課題として残されている。

【引用文献】

- 1)Allport G (1937) : *Pattern and Growth in Personality*. London : Holt, Rinehart & Winston
- 2)Davis R A (2001) : A Cognitive Behavioral model of pathological Internet use. *Computers in Human Behavior*, 17, 187-195

- 3) Glaser B & Strause A (1967) : *The discovery of grounded theory*. Chicago IL : aldine. 後藤隆・大出春江・水野節夫 (訳) (1996) : データ対話型理論の発見—調査からいかに理論をうみだすか 新曜社
- 4) Grohol J (1999) : Too much time on-line : Internet addiction or healthy social interaction. *Cyberpsychology and Behavior*, 2, 395-402
- 5)Holmes TH, Rahe RH (1967) : The social readjustment ratings scale. *J. Psychosom. Res* 11, 213-218
- 6)池田謙一・小林哲郎・志村 誠・呉 國怡 (2005) : インターネット・コミュニティと日常世界誠信書房
- 7)Joinson A & Dietz Uhler B (2002) : Explanations for the perpetration of and reactions to deception in a virtual community. *Social science Computer Review Special Issue on Psychology and the Internet*, 20 (3) ,275-289
- 8)Joinson A(2003) :*Understanding the Psychology of Internet Behaviour*. English: Palgrave Macmillan Ltd. 三浦麻子・畦地真太郎・田中 敦(訳) (2004) : インターネットにおける行動と心理 北大路書房
- 9)丸山 晋(1994) 情報社会とストレス 臨床精神医学 23(7) 713-717
- 10)文部科学省 (2002) : 情報化が子どもに与える影響 (ネット使用傾向を中心として)に関する調査報告書
- 11)Spradley J (1980) : *Participant observtion*. New York : Holt, Rinehart and Winston, Inc
- 12)Strauss A & Corbin J (1990) : *Basics of qualitative research : Grounded theory procedures and techniques*. Newbury Park, CA : Sage. 南裕子 (監訳) (1999) : 質的研究の基礎—グラウンデッド・セオリーの技法と手順 金剛出版
- 13)鄭 艶花 (2007) : 日本の大学生の“インターネット依存傾向測定尺度”作成の試み 心理臨床学研究, 25(1), 102-107
- 14)鄭 艶花 (2008) : インターネット依存傾向と日常的精神健康に関する実証的研究 心理臨床学研究, 26(1),72-83.
- 15)Wastlund E・Norlander T・Archer T (2001) : Internet blues revisited : replication and extension of an Internet paradox study. *Cyber Psychology and Behavior*, 4, 385-391
- 16)Willig C (2001) : *Interoducing Qulitative Research in Psychology*. 上淵 寿・大塚まゆみ・小松孝至 (訳) (2003) : 心理学のための質的研究法入門 培風館
- 17)Young K (1998) : *Caught in the net : how to recognize the signs of Internet Addiction And A winning strategy for recovery*. New York:

(原稿受付 2013 年 1 月 15 日)